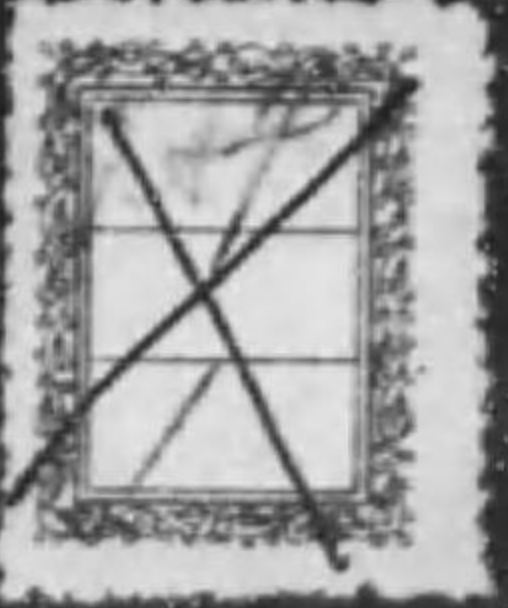


特 116
684

重習
直入
三曲



始



并116
684

三曲



初瀬六代

東國下

西國下

三曲

目



初頼六代

^{サシ上} 我れ世向の無常へ旅泊の夕へあ
 らわれ有為の轉衰へ草露の
 何^白又減するか如し。われ一所不位
 の伊門とて縁又任せて徳國
 とめくる^{カル上}公所舊跡おのつから捨
 てて交する塵の世の夢も現も

三四

隔てあぐ。好去脚来の境界に空
る。こゝは大和國初衆の觀世音ハ
靈驗殊勝の清事あれハ暫く集
籠山寺の教景と云ふに
山下從身え各廻りて人家雲又連お
か晚鐘雨又響音まぬ上川隈もあ
は暮れかゝる雲の波。あは暮れか

る雲の波。さあから海の如くまた
補陀落もかくらくの初衆の寺は
有難やけ元まや元延虫小舟。初衆の山
子降る雲と。詠み元も元さ元そ元な元か
く川の浦の名もある。景色かあ
浦の名もある。景色かあ元はあハ
れある事々の。清堂の西のつまた局

しつらひて女性の籠りけるか。
 身又思ひありしと見ええてカレ上悪ひ
 かねたるころの紫の色又出て音に
 立てるもたゞ後くのみある有様あり。
 或時女房達と豊くまの河堂の
 四圍とまわつり。千度の歩みと運よ
 と見ええり。かまた数も終らざるに

あわたし〜くあるはきり入り。只今
 清ま〜き事とこそ聞いて依へ
 駿河の國千本の松原まで。平家
 の棟梁六代所前の斬られさせ給
 みとカレ上〜てゆら中す者のゆと。申
 しもあへす飲〜まろひびたりを
 の時主の女房。さうりともこそそ

思ひひいはさては早ち転られけるかと
 聲こゑも惜います所し沈しみ珍みて
 六代の母あてましましけるよと
 その時らそ人も思ひひのれ傳へ
 聞きく孔子は鯉魚と別れて思ひの
 火を胸に焚き白居易ハ子と先
 立てて枕と強る藥と恨む

引れ皆仁義禮智信の祖師文道
 の大祖たり況や来世の前生といひ
 然も女人の身とて恩愛の別れ
 と悲む事げはも誠と理あれ
 ともその理も過るはかり餘
 所の杖もうまはつやあつて
 母前後とたま入て宣ふやうふ

るにても種か子とよばよ人の時助
 けとこそ頼みつるはその時かひ
 も無きならんも一は真に斬ら
 れあひ無藤立無故六きりも来り
 てやす入まはたぐ餘可人のつて
 はたよ早くも聞ゆる程あはれをそ
 かれらへ逢きやらしし。聲も惜

まぬ言の葉のさもびもまより
 草何とか種と思ひひ子の浮世は
 残る身そつらま初初名初名の鐘の
 聲。つづくつくる思入世の中へ。誌行を
 常の理。假よんゆる親子の夢
 幻の時の間と。かねてはかくと思
 へも真別れもある時へ思ひ

心も打ち失せて。だ元くられくれと
 堪へかぬる。胸チの火は焦れて身ハ
 清ゆる心のみあり。怒チさるはてども我
 か子の失をれん。とけは。知
 れともあほや。さうとももの頼チみと
 かけまくも。奈チくも。た。頼チめ。南
 無や大悲の觀世音。願チをく。八固チと

りの。所チを教チ又任チせつ。念チ彼觀音
 力チ刀尋チ段チ之の切チ力チけチは。偽チらチせ。給
 ます。な。劍チも。折チらチせ。て。神チかチ子
 と。助チけ。給チへ。や。上チり。けチる。所チは。
 男チ入チまチた。り。つ。怒チ藤チ五チを。り。た
 り。と。芽チせ。は。所チ母チも。如チ今チは。如チ今
 には。宣チへ。の。喜チひ。は。あり。た。り。後チ

河の千本にて院中に斬られ元を給
 ひ元と元人その時元馬と早めて
 きて中あり元喜ひの所元教書にて元助
 からせ給元由元申せは御母も御り
 の事元の心元や嬉元し元た元も
 わ元ま元入元す元た元危元然元とあ元ま元れ元つ
 つ元有元難元の事元やと手元と元合元せ給元よ

杖元も元覺元え元す元落元つ元る元後元の元嬉元し
 子元袖元と元た元よ元乾元さ元ぬ元や元後元あ元ら元ん

東國下

そ元も元そ元も元こ元の元盛元久元と元申元す元平
 家譜元代元の元侍元武元略元の元達元志元たり
 一元か元も元鎌元倉元殿元ま元て元知元ろ元し元召元し
 たり元兵元あり元冠元の元都元と元出元て元一

よう。音は位きとてめし加茂川
 や。末白門と打ち渡り。栗田口に
 も。まきりかた。今は娘とカ松坂
 や。四の宮河原。四の辻。開の山路
 の。村時雨。いと。狭やぬらすらん
 知るも。知らぬも。逢坂の。嵐の。風
 の。音。寒まき。松本の。宿。は。打出の

濱。湖水。に。月。の。影。え。え。て。氷。に。彼
 や。た。む。ら。ん。越。と。辞。せ。し。花。露。か
 扁舟。は。棹。と。移。す。あ。る。五。湖。の。煙
 の。波。の。上。か。く。や。し。思。ひ。知ら。れ。た
 り。昔。長。柄。の。山。里。も。都。の。名。と
 や。残。す。ら。ん。石。山。寺。と。拜。め。は。な。れ
 亦。救。世。の。悲。願。の。世。に。越。え。給。ふ

所^レ夢^レひ。頼^ルも^レし^レくそ^レや覺^レゆる。
 瀬田の長橋かけみえて長虹
 彼子連あれり。浮世の中を秋
 草の野路舞原の朝露おき別
 れ行く旅の道幾夜か夜かを
 重ぬらん^上露も時雨も守山へ
 下望^下眺らぬもみち葉の夕日^下は

色や塙るらん古^下入^下をと鏡山形と
 誰^下か^下志^下入^下へま。勇^下む^下心^下のあけれども
 その名はかりハ武作の宿。また
 通ひ路も清茅生の小野の宿
 よりえ渡せば。奔^下斤^下と研^下し摺
 針や番馬し音の聞えしへの
 山松の夕嵐旅寝の夢も醒

か井の。みつから。枯草花。誰か宿
とも。柏原。月も。稀ある。山中に。
不破の。園屋の。板底。久く。からぬ。
旅。また。たよ。都の方。そ。ま。ま。垂。
井の。宿と。過。き。行。け。へ。青。野。か。
原。は。名。の。み。し。て。皆。夕。霜。の。白。妙。
枯。葉。に。漏。る。草。も。あ。り。か。る。浮。

世に青墓や捨てぬ心と抗。漸。門。
例の。候。海馬の。渡り。して。下。津。
萱。津。打。ら。ら。ま。い。て。熱。田。の。宮。に。
ま。れ。へ。蓬。萊。宮。の。名。の。み。し。て。
刑。戮。の。近。ま。こ。の。身。の。不。死。の。薬。や。
あ。か。る。ら。ん。聲。向。の。所。の。時。海。濱。干。
汐。子。つ。ま。捨。小。舟。さ。て。仲。よ。や。

出てぬらん サレ上 非 カ かのの蜘蛛手に
 かる八橋や 元 伏邊 元 は白 元 小杜若 元 在
 原の中將の 元 ちる 元 さる 元 来ぬ 元 と 元 祿 元 せ
 しも 元 今身の上 元 は 元 知られ 元 たり
名 都 元 行 元 く 元 来 元 へ 元 白 元 真 元 三 元 郎 元 矢 元 刻 元 の 元 宿 元 赤
 坂 元 松 元 子 元 かり 元 れ 元 る 元 藤 元 が 元 枝 元 の 元 指 元 の 元 花
 と 元 宮 元 路 元 山 元 和 元 花 元 郎 元 う 元 し 元 今 元 橋 元 打 元 ち

渡り 元 雲 元 と 元 煙 元 の 元 二 元 村 元 山 元 の 元 高 元 師 元 の 元 名
 の 元 み 元 して 元 野 元 里 元 は 元 道 元 や 元 つ 元 く 元 ら 元 ん
上 彼 元 の 元 滿 元 干 元 の 元 灼 元 見 元 坂 元 蒼 元 海 元 天 元 連
 あり 元 して 元 雲 元 は 元 漕 元 ま 元 入 元 る 元 仲 元 つ 元 舟 元 吳
 楚 元 東 元 南 元 は 元 わ 元 かり 元 れて 元 乾 元 坤 元 日 元 夜 元 浮
 づ 元 り 元 律 元 々 元 ら 元 ん 元 事 元 と 元 白 元 須 元 賀 元 賀 元 に 元 軌 元 白
 かり 元 み 元 ら 元 水 元 鳥 元 の 元 下 元 安 元 かり 元 ん 元 ぬ 元 心

かお。夕ののほる橋本の。備松が枝
 の年々には。幾春秋と送りけんぬ
 はうららの。前澤。夜明け方の
 遠山よ。さや横雲の。曳馬より
 天龍川も。もろえたり。衰へ果つる
 空の他田の。宿夢坂。旅寝またに
 も。別れぬれは。夢も。見附の國

府とかや。考邊は。波と掛川。小夜
 の中。山あかりな。かよ。命のうらみ
 白雲の。又越ゆ。し。思ひまや
 憂き事。よとの。み菊川。や。旅の疲
 れの。跡。場か原。妻る。剣。敵の大井川
 川邊の。松よ。言。回。も。ん。花葉の
 藤枝の。幾。春。かけ。て。白。ふ。らん。別

此より旅の夜たみも心国部の宿
 とかや鳥の細道かけ過きて
 馴衣と宇津の山吹や夢は
 ありぬらん。羨は近く引く綱の手
 越の川の朝夕は思ひと駿河の
 國府を過ぎ清見か開のまかか
 かよとまらぬ旅や憂かゝらん。薩

壇山より見渡せは遠く出てたふ
 三保か崎。海岸そこくも白波
 の松原越に眺むれば指は寄りす
 登虫小舟。餘りよ袖や濡すらん
 由井神原とも過きかは田子
 の浦曲も近くある。西天唐土
 杖素國並よ山あま富士の根か

萬天の雲と重ぬらん浮橋が原
 と過きしかは左の湖水波寄せ
 て蘆葉清水の浮鳥の上毛
 の霜と打ち拂ふ右の蒼海遙
 いて漁村の孤帆出あり頃教
 智解の衆生の火宅の門と出て
 かね羊車鹿車大牛の車返

いへこれかまゝ 上 伊豆の國府も

まきしかは南無や三時の明神本

地大通智勝佛過去塵點の如く

にて黄泉中有の旅の空長周

冥の潤まても神等と照し給

へと深くそ祈誓申しける雪の

古枝の枯れてたよ二度花や咲ま

ぬらん

西國下

壽永二年の秋の頃平家西海に
赴き流る城南の離宮より都
と隔つる山崎や開戸の院より玉
の所連とかりまの据ゑて八幡の方と
伏拜み。南無や八幡大菩薩人皇

始り終ひて十六代の尊主たり。
所裳耀門の底清く。末を受け
強く御惠あつかひ捨てさせ終ひ
へま。他の人よりも種か人と誓
はせ終ふあるものと西海の波の
立ち席り。一度帝都の雲と踏
み九重の月と眺めんと深く

祈^マ誓^ヒ中^ノせ^シとも^モ。悪^マ道^ト。吾^ガ道^ノの^ソそ
 の^ノ積^リり。神^ノ明^ノ佛^ノ院^ノ加^ヘ護^スも^モあ^リく。
 責^シ賤^ニ上^ニ下^ニに^テ捨^テら^レ帝^ノ城^ノの^外
 又^モ赴^ク。何^トあ^リ行^ク水^ニ無^ク。漱^ル川^ノ。
 山^ノ本^ノ遠^クく^メく^リ来^テ。む^カり^ノ男^ノ。
 の^ノ音^ノ又^モ位^キき^し。鬼^ノ一^ノ口^ノの^ノあ^リ川^ノ。う^ラ胡^ノ。
 録^トと^ト携^シへ^テ。弱^ク又^モ任^セて^テ。お^チら^レ渡^ル。

す。上^ニ馳^ルれ^し。都^トと^ト立^チら^レ出^テ。い^つく^ニ
 は^ハ猪^ノ名^ノの^ノ小^ノ岳^ノ。厚^ク。一^ノ夜^ノ假^シ寝^スの^ノ宿^ノハ
 無^ク。蘆^ノの^ノ葉^ノ分^ノの^ノ月^ノの^ノ影^ノ。隠^レれ^し
 て^テ。住^ルめる^ル。昆^ノ陽^ノの^ノ池^ノ。生^ル田^ノの^ノ小^ノ野^ノの^ノ
 木^ノの^ノつ^つから^ら。こ^ノの^ノ川^ノ。彼^ノ又^モ浮^レ寝^セし^し。
 鳥^ノハ射^ルね^くも^も。如^ク今^ノあ^レを^レ。身^トと
 限^リと^トや^ヤ嘆^クくら^ん。千^ノ山^ノの^ノ雨^ノ。水^ト

増さう。増ゆる。時。名。の。み。し。て。晒
 す。か。ひ。あ。ま。い。布。引。の。龍。津。白。波
 音。立。て。く。雲。の。ら。ら。ら。は。流。る。ら。ん。
 五。手。舟。の。名。跡。は。五。百。の。舟。と。造。り
 て。貢。と。絶。え。す。運。び。も。武。庫。の
 浦。こ。そ。白。あ。れ。福。原。の。故。郷。に。去
 ま。か。は。人。々。の。家。々。も。年。の。三。と

せ。に。荒。れ。果。て。上。鳥。松。桂。の。枝
 に。鳴。き。狐。蘭。菊。の。叢。は。隠。れ。住
 む。馴。れ。し。名。残。も。彼。風。の。荒。磯
 鉸。住。み。捨。て。く。た。る。蟻。の。子。の。住。み
 所。宿。も。定。め。ぬ。假。寝。か。な。相。國。の
 作。り。置。か。れ。し。所。々。も。荒。れ。果。て
 て。古。宮。の。新。塔。月。漏。り。金。玉。と

交へて粧花の轅と集めしも
 只今のやうに思われて昔を哀
 しかりける 釋迦一代の藏經五
 千餘卷と名又書き套海の底
 又沈めて一居の鳩と築ましかへ
 数千艘の舟と留め風波の歌と
 助けしは有強かりしかたみあり

舟と浮波の寄るあき身の行く
 末を悲しき かくてまよと初め
 なり。皆舟舟又召されけり。習ハ
 ぬ旅の浮枕思ひひやるこそ悲し
 けれ 南殿の他の龍頭鷲首の
 舟舟と。思ひあからも寒江よ
 物の翁の棹の歌また聞き列ぬ

聲々には。仲ある。鷗。磯。千鳥。夜啼ひ
 つれて。立ち。騒く。風帆。彼又。潮の
 船聲。の。月を。と。動かす。和。田。の。岬
 を。め。くれ。の。海。岸。遠。き。松。原。や。海
 の。碧。又。續。く。らん。須。磨。の。浦。も
 も。成。り。か。ら。四。方。の。嵐。も。烈。しく
 て。開。吹。ま。し。越。ゆる。音。あ。か。ら。後。の

山の。夕。煙。紫。と。し。ふ。もの。あ。す。も。も
 見。あ。れ。ぬ。か。た。の。あ。ま。れ。あ。り。琴
 の。音。又。引。ま。と。め。ら。る。と。詠。け
 ん。五。帝。の。君。の。こ。の。浦。も。心。と。と
 め。て。筑。紫。舟。昔。の。上。り。今。下。る。彼
 路。の。末。そ。と。か。あ。ま。し。頃。く。月。の。明
 る。鳥。六。十。餘。の。年。を。経。て。向

へす語りの古をと思ひやるこそ
 ゆかりけれ。船より車に乗り後り
 暫しそはと思へとも。須磨や
 明るの浦傳ひ。源氏の通ひ
 道あれは平家の陣よ。いか
 とて又この浦と傳ま出たす。ゆ
 漱は彼も高砂や尾上の松の夕

尚。舟といつづくに誘ふらん。室の
 伯の昔。籠かけの際も。る夕つく夜
 遊女の歌よ。歌の道。浮世を渡る一
 節も。眞よ哀ありけり。習はぬ旅
 は。牛窓の瀬戸の。落ゆ心せよ
 けよ。あらけあき。武士の。梓の。う
 の。鞠の。浦。賑ふ。氏のかまどの。閑。夢

路とさうふ彼の音
 鳴いて。霜天又満ちて。すさましく
 江村の漁火もほのかよ半夜の鐘
 の響き。客の舟もや通ふらん。蓬窓
 雨もたふりて知らぬ。路の楫枕
 片敷く袖や。ほろらん。荒磯彼の
 夜の月。侘みし影へ席らす

大正拾一年四月拾日印刷
 同 年四月拾五日發行

著作権
 許不惹禎

著作者兼 發行者 廿四世 觀世元滋

印刷者 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川 堂



終

